

ムービー・エッセイ

これだけは見逃せない邦画・洋画セレクション

一俊 辺 洵



道

イタリア各地を力自慢の大道芸人として巡業するザンパノは、彼の助手ローザの死を知らずに海辺の寒村で貧困に喘ぐ母親の元にやってくる。母親は嘆き悲しむが、ローザの替わりに妹のジェルソミーナを一万リラで売り渡す。小柄で純粋無垢なジェルソミーナは粗野な大男のザンパノに道化の芸を手荒に仕込まれる。昼は道化、夜はザンパノの幌付き三輪車の狭い寝ぐらで枕を共にする内に、いつしかザンパノに愛着を

パノは本当はお前を好きかも知れないよ、彼は犬なんだ、お前に話しかけたいのに吠えてしまう」そして「本で読んだのだが、この世にあるものは何でも何かの役に立つんだって。例えば、この小石だつてな」という言葉に一転。目を輝かし、小石を握りしめて、「私がいなくて彼は独りぼっちよ」とつぶやくジェルソミーナ。ある夜、宿を借りた修道院の納屋で、ザンパノに自分をどう思っているのか聞き出そうとするシーン

は不憫で胸が詰まる。「何故、私と一緒になの?」「おかしい事を言う女だ」「私が死んだら悲しい?」「...」「少しは私のことを好き?」「返事をしないザンパノに、「あなたの居るところが私の家よ」とまで言つて、『キ印』が教えた、もの哀しいメロディーを愛用のトランペットで静かに奏でようとする

募り、涙が出る。万言を費やしても語り尽くせぬ道への想いの因るところは、そのテーマの宗教的とも言ふべき優れた普遍性にあるのだと思う。つまり、ザンパノとジェルソミーナに託して、実は私達のことか描いてあるのだ。しかし、道という映画の本当の見所は、野辺の花の様に、どこにも手抜きのない珠玉の細部にある。特に別れのシーンは圧巻だ。海辺の故郷を後にする時の別離の悲しさと希望の入り交じった顔。ザンパノとの「道」を選び、優しかった『キ印』と別れる際の愛しさと哀しさを湛えた伏し目がちな視線。そして、銀のキリスト像が盗まれたことも知らずに別れを惜しむ清純な修道女に見せる感謝と消え入りそうな懺悔の表情は、そのどれもが一遍の詩であり、上質の絵画を見る思いがする。また、起きあがりこぼしの様に、辛いことに会つてもすぐ立ち直る、不屈なほどに天真爛漫なジェルソミーナの明るい心が、報われることのない愛ゆえに、少しづつ壊れていく様も、この別れ際の表情の微妙な変化に見事に表現されている。人は一度に死ぬのではない少しづつ死んでいくのだという想いが胸を突く。この映画は1954年制作のイタリア映画。監督・脚本フェデリコ・フェリーニ。音楽ニノ・ロータ。ザンパノ役にアンソニー・クイン。ジェルソミーナ役にジュリエッタ・マシーニ。彼女は1943年にフェリーニと結婚し、1994年にフェリーニが死ぬと、追うように五ヶ月後に他界した。全編を流れる「ジェルソミーナのテーマ」の哀愁を帯びたメロディーは甘く切なく、この映画の神格化に大きく貢献している。

大好きな家族で
和気あいあい♪
大好きな仲間と
和気あいあい♪
みんな楽しく
和気あいあい♪

〈飲酒運転 絶対禁止!!〉

和気あいあい

居酒屋



小祿店 ☎098-857-8118
国場店 ☎098-831-8067

●営業時間 PM5:00 ~ AM1:00